２０２４年8月１１日（日）

老球の細道８２０号

ミニバスケットボール「ちびっ子大会」観戦雑感

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

世界ではパリ五輪、国内ではインターハイのバスケットボール大会の熱戦が行われている中で、わが会津ではメジャーに負けじと、ミニバスケットチビッ子大会が３日（土）４日（日）の二日間、あいづ総合体育館で開催された。連日３５度に迫る猛暑の中であったが、熱中症で救急搬送をされる選手もなく無事終了した。

地下のコートは先月の県総体時に問題になった床のスベリが今回も露呈した。地下のコートでエアコンもないために湿気による水滴が蒸発しにくい状態になっていた。毎年このような猛暑が続くことが予想されるので、そろそろ学校や公共の運動施設などにはクーラーを設置する時代になって来ているのではないだろうか。

このような暑さにおいてミニバスケット連盟の準備はすばらしかった。フロア以外の冷房の効く個室には常時クーラーを効かせ、ちょっとでも具合が悪くなった子どもはそこで休ませた。そこには看護師の保護者を待機させていた。また、ケガに対しても接骨医を待機させ、試合中のケガに対する準備も完璧だった。

試合の方は孫たちがフレッシュミニ（４年生、３年生）の部とミクロミニ（２年生、１年生男女混合）の部に出場するので家族全員で観戦した。大会前日から初めて着るユニフォームの大きさの調整などで私以外の家族はてんやわんやであった。

試合は勝ち負けなど度外視して、いかにシュートにトライし決めたかに注目して応援していた。ミクロミニの試合は、おそらく世界で初めて行われた１９８１年の米国スプリングフィールドで行われたゲームを彷彿させるような内容だった。１個のボールをめがけて１０人がぶつかり取り合い、ボールを取ったらトラベリング無視でゴールをめがけて走りこむ。チームメートなど視野に入らない。ボールの取り合いに強く、足の速い子どもが活躍する弱肉強食のゲームである。わが孫息子は人の後ろからボールに手を出しているが腰が引けていて優しさ満載であった。爺の想いと現実の狭間を思い知らされた。

一方、フレッシュミニに出場した孫娘は公式戦初ゴールを記録した。思わずガッツポーズをしてしまい、現役コーチ時代の闘争心が蘇って来た。しかしそれも束の間、他人を押しのけてまでボールを取らない、自分から積極的にシュートに行くことができないなどの優しさが目立った。コートの中では「別人になれ、鬼になれ」は小学４年生の耳には届かない。

同じ４年生でも坂下男子、猪苗代女子などにはすでに６年生に匹敵するスキルを見せる子どもたちがいる。ダイヤモンドの原石をどう育てるか、まだカオスの状態のチームプレイをどのようにしてコスモス状態にまとめあげていくか、指導者は楽しみだろう。

帰宅して「孫たちわ優しい」を思い出す。「ま（豆）ご（ゴマ）た（卵）ち（乳）わ（ワカメ）や（野菜）さ（魚）し（シイタケ）い（芋)」の健康基本食品キーワードである。１日１回摂取して健康に配慮し、孫達の大ブレイクまで長生きしようと仕切り直しをした。